法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

アメリカ文学にみるユダヤ人像(その2)

河野, 徹

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
99
(開始ページ / Start Page)
89
(終了ページ / End Page)
122
(発行年 / Year)
1997-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004771

Hosei University Repository

アメリカ文学にみるユダヤ人像（その2）

河　野　　徹

1. 移民の大挙流入と反ユダヤ主義

アメリカは，植民開始以来3世紀にわたってヨーロッパからの移民に門戸開放政策を保っていた。ところがヨーロッパ中に遍く浸透した産業革命の影響で，従来貧困と抑圧に喘いでいた東欧，南欧の各地から，西欧先進国とくにアメリカの労働力不足を見込んで，生活の立て直しを試みようとする人々が続々と流出した。アメリカへは，1880年代から1920年にかけて1,600万もの移民が押し寄せる事態となり，やがて東・南欧からの「新移民」が中・西欧からの「旧移民」を数的に上回って，早くも1907年には，前者が移民総計の80%を占めた(1)。彼らは職と機会を求めて産業都市に集中し，下層労働大衆の主力を構成したから，労働市場に大きな脅威をもたらした。当然ここで，都会のスラム化を憂え，アングロサクソン系の「アメリカ」が，スラヴ系，イタリア系，ユダヤ系など「劣等民族」出身者に呑み込まれてしまうと警鐘を鳴らす移民排斥論者の登場となる。

人種の間に優劣の差をつけることは，人類愛というキリスト教の教えだけでなく，アメリカ建国以来の多元主義思想にも反するが，従来の生活基準や価値観が崩壊する危機に直面した場合に，一種の防衛機制が働くことは不可避だろう。とくに1917年のロシア革命以後は，移民の破壊活動を恐れるヒステリー現象も生じ，やがて連邦議会は一連の移民制限法を可決して，事実上ノルディック系（北方系）以外の移民には終止符が打たれた。

フランスのゴビノー伯爵に呼応して，アメリカではマディソン・グラントらが北方民族優越論を力説していた。グラントはニューヨーク在住の動物学者・優生学者で，相次いで流入する移民，とりわけ周囲に蝟集していたユダヤ人に激しい敵意を抱く。彼の著書『偉大な人種の消滅』（*The Passing of the Great Race*）は徹底した人種差別主義的移民排斥論で，異人種間の雑婚は以

Hosei University Repository

ての外，ヨーロッパの諸民族が交わってもより低劣な類型に偏るから，「ヨーロッパの3民族（ノルディック，ラテン，スラヴ）のいずれかとユダヤ人を掛け合わせれば，ユダヤ人になる」とした[2]。

アメリカ中西部では1890年代に，「頽廃からの復興」をスローガンとして人民党運動が勃興し，「アメリカという共和国を本来の統治者たる人民の手に取り戻そう，国際金権勢力という巨悪によって奪われた生産的人民の経済的機会を取り戻そう」と訴え，具体的には金銀比価16対1を基準とする銀貨の無制限鋳造（free silver）で通貨量を増大させ，人民の通貨たる銀の復権で景気を刺激しようと試みた[3]。人民党は「生産的人民すべての福利」を目的としていたから，必ずしも反ユダヤ主義に直結することはなかったが，「国際金権勢力という巨悪」は彼らのキーワードであり，ニューヨーク，ロンドンなどの大都会で，ユダヤ人やイギリス人の銀行家が農民に不利な陰謀を生み出している，と信じる者は少なくなかった。

人民党と同じく「フリー・シルバー」を唱え，1896年の大統領選で民主党候補に指名された西部の青年政治家W. J. ブライアンは，「金の十字架」と呼ばれる有名な選挙演説のなかで，「あなた方は働く者の額に茨の冠を押しつけてはならない。人類を金の十字架にかけて死なせてはならない」と訴え，ユダヤ人がキリストを磔刑で裏切ったのと同様，大資本は「金」で農民を裏切るのだと示唆した[4]。南部で人民党を率いていたジョージア州知事トム・ワトソンは，「人間の屑がわれわれの頭上にぶちまけられた。わが主要都市のいくつかは，アメリカというより外国である。旧世界の最も危険で有害な連中が，群れをなして侵入してきた。連中がわれわれのあいだに植えつけた罪悪と犯罪は恐るべきものだ」と警告し，「低廉な労働力を求め，その冷酷な政策がやがてわが国の将来に及ぼすやもしれぬ害悪の大きさに平然たる製造業者と銀行家」を非難した[5]。フリー・シルバーを主張した1895年のある怪文書によれば，「世界の金の半分をロスチャイルド家が通貨用として所有し，残り半分のほとんどは同家を補佐する衛星機関が握っている。」[6] このように大資本と結び付けられたユダヤ人だが，何百万という文字通りの「金なきユダヤ人」が芋を洗うようなスラム街で窮乏していた事実や，ヴァンダービルト，カーネギー，ロックフェラーら産業界の大富豪，そしてアメリカの大銀行家のほとんどがキリスト教徒だったという事実は一切捨象されてしまう。

金メッキ時代の活気が徐々に衰えつつあったとはいえ，富裕階級の存在は歴

Hosei University Repository

然としており，そこに這い上がろうとする野心家は後を絶たず，「成り上がり者」にたいする差別的慣行が広がりつつあった。旧世界では思いも寄らぬ地位向上を他の移民集団に先んじて達成していたドイツ系ユダヤ人とて，所詮「成り上がり者」の域を出ず，アメリカの主流社会が彼らに感じた脅威と軽蔑の複合的感情は，新聞・雑誌上の風刺漫画に紛う方なく表象されていた。そこへ降って湧いたようにアメリカの既成ユダヤ人社会を直撃したのが，東欧ユダヤ人移民の大挙流入である。そもそも東欧ユダヤ人は，その風体からして珍妙かつ乱雑で，上陸の瞬間からアメリカ人一般の顰蹙を買っていた。

ジャズ評論家，公民権運動指導者として名高いナット・ヘントフが，『ボストン・ボーイ』(1986) という自伝のなかで，当時の有様を興味深く語っている。「東欧出身のユダヤ人が，にしんと黒パンを抱えて 1882 年にはじめてボストンへやってくると，たちまち退去を要求された。そう要求したのは，当惑したボストン在住のドイツ系ユダヤ人で，町の上流階級 (Brahmin) が，自分たち正真正銘のユダヤ系紳士淑女を，これら新移民となんらかの形で結びつけはしないか，と恐れたのである。そこで東欧移民の最初の一団は，ニューヨークへ運ばれた。たしかに，この都会なら何でも受け容れてしまうだろう。しかしその後，ロシア，ラトビア，ハンガリー，ルーマニア等々で悲惨な目にあったユダヤ人が，とにかく続々とやってきて居坐った。」その居坐ったロシア出身のユダヤ人のなかに，やがてヘントフの両親となるはずの男と女が交じっていたわけである。「やがてすぐに分かったことだが，われわれ東欧ユダヤ人にどこか他の場所，それも遠く離れた場所で上陸してほしいと願っていたボストン市民は，何もドイツ系ユダヤ人だけではなかった。ヘンリー・キャボット・ロッジ上院議員 (1850−1924) は，当時のことだから政治的報復を恐れることもなく，これら新移民とその子孫は「劣等」であると宣言していた。そして第 6 代大統領ジョン・クィンシー・アダムズの孫，ヘンリー・ブルックス・アダムズはこう記している――『いまだにゲットーの悪臭を放ち……異様なイディッシュ語をがなりたてる……あのこそこそしたユダヤ人をみると，背筋がぞっとしてくる。』」[7]

スラム街に流れこんだ東欧ユダヤ人の第 1 世代は，言葉の問題，相互扶助の必要，そして従来の宗教的戒律を崩す不安などから，1900 年ころまで孤立状態にあり，社会的にも経済的にも，先着のドイツ系ユダヤ人のように急速な進出を図るわけにはいかなかった。しかし 1907 年までには，彼らのうち少数が

Hosei University Repository

衣類製造業や不動産投機で財をなし，第2世代も中流階級の生活を始めていた。これでドイツ系と東欧系の間に介在していた画然たる懸隔も，以前ほど目立たなくなり，アメリカ人一般の目に両者の相違は映らなくなった。したがって膨張する一方の東欧系移民にたいする地元アメリカ人の反感は，ユダヤ系アメリカ人全般に向けられ，反ユダヤ的差別の壁は一層厚いものになった[8]。

ここで19世紀末から合衆国へ流入した移民の数を概括しておきたい。1890年から1914年までに16,516,081人の移民が入国し，そのうち1,694,842人つまり全体の10%以上がユダヤ人だった。1890年までに正式登録された移民の総計はわずか15,436,042人に止まり，その大半が北欧，中欧，西欧出身で，ユダヤ人はその2%以下であった[9]。したがって1890年以後25年間の津波的移民で，アメリカ国民が受けた衝撃は甚大であった。この国を創建したのはそもそもだれか，またその子孫たる定住者と最もよく調和するのはどの集団か，について大々的な再検討が行われたのは当然である。大西洋の両側で流行していた北方民族優越論の影響の下で，上層，中層のアメリカ人は新来移民を野蛮人とみなし，ノルディック系以外の移民全般にたいして，十羽一絡げに否定的評価を下すのが習いだったとはいえ，異質者にたいする嫌悪（dislike of the unlike）を他よりもしたたかに浴びせられた民族集団は，やはりユダヤ人であった。

20世紀に入って，社会悪を暴露する新種のジャーナリズム，いわゆる「マックレーキング」が興り，提起された問題の解決に乗り出した政治家を介して，多種多様な不正を除去するための法案が，都市から連邦に至る各級の立法機関で可決された。このような状況下で新聞・雑誌が頻々と取り上げた問題の一つは，果せるかな入国した移民の民族別構成である。他の問題ではどんなに意見が分かれようとも，東・南欧から押し寄せた下層外国人の大群が，以前の移民集団ほど体格・知能ともに秀でているとは認められず，彼らがアメリカ社会に同化したら，民族の雑種化は必至であり，アメリカ人エリートが保有してきた国民性と文化が危殆に瀕していると思われたのだ。思想・信教・血統の如何を問わない門戸開放がアメリカの伝統だったにせよ，国民の大多数を占めるプロテスタント教徒にとって，流入した移民の圧倒的多数がローマ・カトリック教，ユダヤ教，ギリシャ正教の信者だったことは，とくに憂慮すべき事態だった。とくにユダヤ人は，教義上キリスト殺しの後裔，改宗を頑として拒む異教徒とされ，その延長線上で，合衆国市民として受容されたのに，一般社

Hosei University Repository

会から孤立したままの異質民族集団とされた。利得のためには手段を選ばぬ冷酷かつ強引な悪徳商人，つまりシャイロックの後裔という先入見は依然として根深く，当時の大衆雑誌は，鼻が異様に巨大で，金貨をうずたかく積み上げ，狂ったように身振り手振りするユダヤ人像を定着させた。このような紋切り型の神話的ユダヤ人像を，以下で取り上げる4人の作家のそれぞれが，意識的にであれ不注意からであれ，作品中でどのように利用しているか調べて行きたい。

2. ヘンリー・アダムズ――『モン・サン・ミシェルとシャルトル』他

概して西部人は，多種多様な民族や階級の人々が力を合わせて無限の可能性に挑んだあの開拓者精神ゆえか，東部人よりは民主的で，ユダヤ人にたいしても過度の偏見からは免れていた。それに反して，往時の支配的地位から没落の一途にあったニュー・イングランドの名門知識人たちのユダヤ人観は，よくみても穏やかな社会的偏見，悪くすると旧世界的なユダヤ人憎悪そのままであった[10]。その憎悪型に属するユダヤ人観で他の追随を許さなかったのが，ヘンリー・アダムズである。名門政治家でなく産業経営者がキングメーカーとなってしまった時の流れで，彼は生得権ともいうべき国政参画の夢を挫かれてしまった。その怨念をもろにぶちまけられたスケープゴートが，ユダヤ人だったといえよう。公刊された著作のなかではまだ幾分慎重だが，私信の随所でそのユダヤ人憎悪の迸りを見出せる。

ヘンリー・アダムズの曾祖父ジョン・アダムズ（1735−1826）は独立戦争の英雄で第2代合衆国大統領，祖父ジョン・クィンシー・アダムズ（1767−1848）は第6代大統領だった。この祖父は，1780年にオランダのアムステルダムでシナゴーグを訪れ，「ここのユダヤ人はみんなひどい連中だ。こんなみじめな風体をした人間に会ったためしがない。ひとの頭から両眼を盗むことだってしかねまい」と日記に認めている。（1780年といえば，革命戦争（1775−83）の最中で，ユダヤ人が，独立派のウィッグ側からは親英派のトーリーとして，またトーリー側からはウィッグとして排斥されていたアメリカの国内事情や，当時の彼がまだ齢13歳でしかなかったことは，斟酌すべきだろう。）また大統領に就任した1825年前後に，彼は「米ユダヤ人環境改善協会」（ASMCJ）つまりユダヤ人をキリスト教に改宗させる運動のスポンサーとなった[11]。父チャールズ・フランシス・アダムズは，南北戦争勃発後リンカーンの命で駐英公使に

Hosei University Repository

就任，イギリスの南部承認を思い止まらせて北部の勝利に貢献するなど，アメリカ史上最も有能な外交官とうたわれた。この父は，長女ルイーザ・キャサリンをユダヤ人の許へ嫁がせている。

ヘンリーは1838年に生まれ，ハーヴァード大学卒業後，2年間のヨーロッパ留学を経て帰国，南北戦争勃発とともに駐英公使に任ぜられた父の秘書を8年間勤めた。その間頻々とイタリアやフランスを旅したことが，後日中世礼賛に傾倒する契機となる。1870年からハーヴァードで中世史を教える傍ら『北米評論』の編集に当たり，1877年からは妻マリアンとともにワシントンに居住，国務省公文書館で研究に明け暮れた。当時の権力複合体，そして民主政治そのものにたいする彼の幻滅は，1880年に匿名で刊行された小説『デモクラシー』に反映している。1885年にマリアンが服毒自殺した後，彼は地球上隈なく放浪し，画家ラファージュとともに日本にも足跡を残した。日光から終生の友ジョン・ヘイに宛てた1886年8月22日付の手紙のなかで，男女混浴を10分間目撃した感想をこう述べている――「日本人の男女間にどんな風習があるのかさっぱり分からない。というのも，ジャップは猿で，女の方はとてもできのわるい猿だと思えて仕方がないからだ。」(12) 取り繕いようのない暴言だが，熱愛していたマリアンに先立たれた直後で，彼の内面は荒み切っていたものと思われる。中世フランス聖堂のガイドブックとして執筆された『モン・サン・ミシェルとシャルトル――13世紀的統一性の研究』(1904) で，アダムズの描いている聖母マリアはマリアンが原型だという説もあるくらいで(13)，愛慕の対象を喪失した衝撃の深さは想像を絶するものだったのだろう。ハラップは，マリアンの死後にアダムズの反ユダヤ的罵倒が激しさをました，とさえ指摘している(14)。

小説『デモクラシー』では，アダムズ自身の代弁役を務め，妻マリアンもモデルとして投影されている未亡人のマデレイン・リー夫人が，周辺に有為の政治家を集めて政治改革，とくに政党が情実で官職の任命を決める猟官制をやめさせようと奔走するが，苦い幻滅を味わう。リー夫人の仲間うちに，ハートビースト・シュナイデクーポンという名のユダヤ系青年紳士とその妹ジューリアがいて，ともに「イスラエルの王家全部の血統を継ぎ，栄光に包まれたソロモンよりも誇り高い」とされている(15)。シュナイデクーポンとは，無記名利付き債の利札を切る者，つまり投資家を茶化した名前で，明らかに財力とユダヤ人が結び付けられている。ニューヨークの大銀行家でキリスト教に改宗した

Hosei University Repository

オーガスト・ベルモントの息子，青年弁護士ペリー・ベルモントがモデルだとされており，ペリーは父親の名代としてロスチャイルド家に使いしたこともあるというから，たしかに名実ともに「シュナイデクーポン」なのだろう[16]。

芸術と文学を嗜み将来を嘱望されているシュナイデクーポンは，リー夫人の猟官制反対運動に協力し，運動が失敗した後，夫人とともに，かねてから心を寄せているその妹シビルをもヨーロッパへエスコートし，自家用のヨットを地中海へ回して中近東周遊をしましょうと約束する。この小説が刊行された1880年までのアダムズの反ユダヤ的発言からして，ユダヤ人がこのように好ましい人物として描かれたのは意外である。その前年の1879年10月にスペインを訪れたアダムズは，「マドリッドほど醜悪で救いがたい首都はなく」何もかもがひどいが，「ここの人間ときたらユダヤ人も顔負けだ」と述べ[17]，さらに同年12月には「ユダヤ人とムーア人にいやというほど出くわしたので，異端審問について以前よりも寛大な見方ができるようになったし，まあ無知な連中はぶつぶつ言うかもしれないが，スペイン人は，崇高な目的を理解してそれを遂行した，と感じられるようになった」と述べている[18]。

アダムズが『デモクラシー』で反ユダヤ的表現を抑えたのは，フィラデルフィアのユダヤ人チャールズ・クーンと結婚したアダムズの長姉ルイーザ・キャサリンのことが頭にあって，姉夫婦のことをリー夫人とシュナイデクーポンの交際に重ね合わせていたのかもしれない。彼は『ヘンリー・アダムズの教育』のなかで，ルイーザを「自分よりはるかに頭がいい」と形容しており[19]，ルイーザと重なり合うリー夫人への敬意ゆえに，シュナイデクーポンは，「クーポン切り」という表象こそ芳しくないが，反ユダヤ的誹謗は免れている。それにモデルとなったベルモント一家が，すでに改宗していたことも，反ユダヤ的言辞の抑制につながったのだろうか。シュナイデクーポンを例外として，私信はもとより公刊された彼の著作中でユダヤ人が好意的に扱われたことはない。

1904年に13世紀の聖母マリア像を賛美した上記『モン・サン・ミシェルとシャルトル』の私家版が配付された。1895夏ロッジ一家とともにモン・サン・ミシェルを訪れ，じかにノルマン文明と接触したことで，彼はアングロサクソン文明を対照的に軽視する新しい歴史観に到達していた。自分は本質的に11世紀ノルマン人で，結局その「遅進性」ゆえに20世紀文明からかけ離れてしまい，この世界で地歩を占められないでいるのだ，と彼は感じた。ボストンも，19世紀後期産業文明のどの側面も，自分の好みに合わなかったから，彼とし

Hosei University Repository

ては，周囲の混沌と喧騒を避け，想像力も芸術性も豊かな 11 世紀，12 世紀ノルマン人の間で，つまり中世的世界で，慰藉を得たかった。12 世紀的統合性の象徴たる聖母マリアを，アダムズは誰よりも熱烈に称賛した。ノルマン建築には静謐感と安定感，そして規模と照明の程よさがあり，誇らしさや力みや自意識がない。これに比べてゴシック建築のアーチなど，落ち着きがなく，今にも摑みかからんばかりで，虎視眈々，世界を食い物にせんとする，まさに「ユダヤ人の嫡出子」だ，ということになる[20]。

アダムズは，ユダヤ人をノルマン人とは対照的な，つまりキリスト教文明の下で成就された中世的統合に参画しえず，むしろそれに敵対した「経済的類型」の権化とみなしている。ユダヤ人の芸術的，文学的感覚は，非ユダヤ的な別種の精神状態から生まれた芸術的成果を汚すもので，趣味の悪い家具や室内装飾を，アダムズは「ユダヤの典型」と称した[21]。マリアについて彼はこう述べる――「他の女王たち同様，彼女にも人間として数々の欠陥と偏見があった。彼女は自らの血筋にもかかわらずユダヤ人を嫌い，彼らに辛く当たる機会を逃すことはまれだった。」[22]マリアの数々の「偏見」には，著者自身に好都合な数々の偏見が投影されているのだろう。『ジェファソン及びマディソン政権下における合衆国の歴史』（1889−91）でも，アダムズは，「記述に過去時制だけを用いた結果，他人の口から自分自身の意見を語らせることができた」し，第一次資料からの引用で客観性を装いながら，実は「当事者」としてアダムズ家の政敵たるジェファソンとマディソンを歴史的批判に晒す狙いがあったという[23]。端倪すべからざる論客というほかはない。

第 18 章「ノートルダムの奇蹟」の中でアダムズは，キリスト教徒でなくユダヤ教徒の幼子が聖母に救われる奇跡譚を披露する。「その幼子は，うっかりキリスト教会の聖体拝領に参加しため，父親の手でかまどのなかへ放り込まれる。かまどが開かれると，炎の真ん中に無傷の幼子を膝に乗せた聖母が座っておられた」というのである[24]。チョーサー作『カンタベリー物語』がシェイクスピア作『ヴェニスの商人』とともに反ユダヤ的文学作品と目されるのは，その中の一編「女修道院長の話」ゆえである。7 歳のキリスト教徒の男児が，登下校の際ユダヤ人街を通りながら，いつも聖母讃歌を歌うので，ユダヤ人に雇われた殺し屋が男児の咽喉を切り裂き，肥だめの穴に放り込んだ。翌朝母親がその穴の近くで息子の名を呼ぶと，息子は肥だめのなかで仰向けのまま朗々と同じ讃歌を歌い始めた，という一種の聖母譚である。幼子をかまどや肥だめの

Hosei University Repository

穴へ放り込むユダヤ人男性の残酷さを，アダムズはシャルトルの北玄関を飾るアブラハムとイサクの彫像にも感じ取る。「でも聖母の嗜みがいかに素晴らしく，清らかであったかが分かる。彼女は痛々しい光景になんと怯んでおられることか。ここの中央の格間には彼女の右手のダヴィデ王と並んで，わが子イサクを生贄に捧げようとするアブラハムの巨像がある。聖母を象った女性にとってこの上なく厭わしい主題があるとしたら，それは男性の愚劣さと残酷さがおぞましく重なったアブラハムとイサクのそれである。」[25] ユダヤ人にとってこの主題は，父祖アブラハムが長男を生贄に供するという苛酷な試練で信仰の証を立て，同族が子々孫々に至るまで神の祝福を授かる，という荘厳この上ないものだ。それを愚劣で残酷と断じられたのだから，容姿や性格や商慣習をめぐっての誹謗よりも，ユダヤ人にとってはより重く深い衝撃かもしれない。

同時代の産業文明と金権政治に絶望し，中世的世界への沈潜に憧れていたアダムズだから，彼の政治談義は捨て鉢的な相貌を呈する。自分の階級的地位はヴィクトリア朝時代からの繰り越しで，資本家側と労働者側双方のはざまで押しつぶされる宿命だと悟っていたから，金本位制支持で大統領選に勝ったマッキンリー政権にたいしても，アメリカ鉄道組合のデブズを代表とする労働者組織にたいしても全然共鳴せず，フリー・シルバー論争への対応もニヒリスティックな高みの見物だった。1896 年に金本位制が勝ったことで，待ちわびていた文明の崩壊が早まるだろうと期待さえした。なぜなら，「銀は金融資本家の利益になって，金貸しの支配をいつまでも長引かせるだろうが，金はその支配を終わらせるからね。」[26] アダムズは金融資本をユダヤ人と同一視していたから，産業資本の方にずっと好意的だった。1896 年に彼は，ユダヤ金融資本の長い腕がアメリカへも延びている実例として，銀貨の自由鋳造を妨害するためユダヤ人銀行家らがアメリカへの借款 6 億乃至 10 億ポンドを随時引き上げると脅迫する計画だったことを挙げ，「われわれはユダヤ人の手中にあり，彼らはわが国の貨幣価値を自由に操れる」と慨嘆した[27]。ユダヤ勢力への挑戦に挫けながらも，彼の手には切り札が握られていた。その切り札とは，文明が崩壊の瀬戸際に差しかかっていて，仮にユダヤ人が勝っても多大の犠牲を伴い，世界も絶滅の運命を免れ得ないという確信であった[28]。

アダムズは 1893 年のシカゴ博覧会と 1900 年のパリ博覧会で展示された壮大な発電機に衝撃を受け，「20 世紀的多様性の研究」という副題を付した『ヘンリー・アダムズの教育』（1907）のなかで，このダイナモに象徴される近代化

Hosei University Repository

の力ゆえに世界は再び多様性を帯びて混沌と停滞に陥るのではないかと危惧している。この発想には，どこかエリオットの「荒地」に通底するものがある。アダムズにとっても，エリオットの場合と同様，カトリック教精神を基軸とした「文化的統一性」が望ましい理想であり，その理想を台無しにしてしまったのが，モザイク化した現代的多様性なのだ。文明の崩壊が間近いことを繰り返し言明しつつも，自らが忌み嫌う文明に取って代わる社会形態を摸索することはまれだった。「アナーキー」とか「コミュニズム」を云々することはあったにせよ，ほんとうに興味があったのは，社会の崩壊に伴う混沌や破壊という側面だろう。世界の動向を意に介せずといい，自分自身にも自分の所属階級にも「絶滅」とか「保存不要」の烙印を押し，幾つかの狭い偏見に耽っている「死人」と自称した彼だが，ドレフュス事件には大きな刺激をうけた。

1890 年代を通じて彼の反ユダヤ主義は，『ユダヤ人のフランス』（*La France juive*）などドリュモンの著作を読みふけることで一層強まった。ドリュモンの野放図さに惹かれる自分に当惑しながらも，彼自身の野放図なユダヤ人嫌悪がそれだけ抑えられることはなかった。ドレフュス事件で，ドレフュス本人が有罪か無罪かの検討はどうでもよかった。ドレフュス支持派は，「ユダヤ側の金と策謀で動いていて，フランス人は怒っている。もちろんイギリスもアメリカもユダヤ側についており，事態をなおさらひどくしている」と息巻いている[29]。ゾラの当局弾劾文「私は非難する」（“J'accuse”）にアダムズは反発し，ゾラが投獄されそうになるや，「ドレフュス弁護の咎が仮になくても，彼が書いた諸々の小説だけで投獄に値する。もっと前に彼を悪魔島送りにして友人のドレフュスと合流させるべきだった。島が収容できるかぎり，ジャーナリストや演劇人の大部分，株式ブローカーは全部，そしてロスチャイルドの類も一人か二人いっしょにね」[30] と放言した。反ユダヤ主義者というよりはユダヤ人にほとんど無関心だった彼の終生の友ジョン・ヘイは，アダムズの取りつかれたような反ドレフュス感情にふれ，「クラカトアで地震があれば，ゾラの仕業だと信じ，ヴェスヴィウスの炎が夜空を赤く染めると，ユダヤ人が火を掻き立ててはいまいかと水平線に目を凝らす」と呆れている[31]。

ドレフュスの無罪が完全に証明されると，アダムズはノルマン人の子孫の側に立って，フランスの伝統を擁護した。彼は軍部に対する思い入れが強く，ドレフュスに冤罪を被せた軍関係者の容疑を晴らそうと懸命であった。「参謀本部側の陰謀でなく，『合点の行く過ち』（“a reasonable error”）ゆえのトラ

Hosei University Repository

ブルだった」というのだ[32]。もしドレフュスが釈放されたら，フランスにとって，二十数年前セダンでプロイセン軍に破れたとき以上の屈辱となり，軍も国民も道徳的崩壊に巻き込まれてしまう。ある日アダムズが大通りへ散歩にでたら，「不気味なざわめきがして，あたりを見回した。もし誰かがアルフォンス・ロッチルドに会いに行くというなら，自分も同道したい気持ちだった」と憤懣を洩らしている[33]。

ドレフュス事件が仮になかったとしても，彼の反ユダヤ感情はつねに活発であった。ワルシャワであるユダヤ系ポーランド人に出会って，彼は「驚くべき啓示」を得たという。「ワルシャワで面白い古代の遺物といえば，このユダヤ人とわたしだけだ。骨董品としてのわたしの値打ちは古さだが，このユダヤ人には奇妙さが加わる。彼をみると虫酸が走る。」（“He makes me creep.”）[34]「われわれはユダヤ人を遠ざけているし，反ユダヤ感情も猛烈だ……それなのに，どうやらわれわれは日を追ってますますユダヤ化しているようだ。」[35] たしかにアダムズは，自ら目撃した個人もしくは集団としてのユダヤ人を忌み嫌っている，と同時に自分と反りが合わない知的，道徳的，経済的雰囲気を抽象的な「ユダヤ人」に仮託もしている。つまり彼のユダヤ人観は両面的で，彼のユダヤ人誹謗を仔細に点検するだけではもちろん不十分だし，彼の反ユダヤ主義を単に反時代的な不信不満の象徴として処理してしまうわけにもゆかない。これは彼の内奥にかかわる問題で，どこまでが個人的病理でどこからが集団的病理なのか，その確定は至難の業だろう。一連の反ユダヤ主義研究で定評のあるロバート・ウィストリッチによれば，「人間の不合理的要素を把握する助けとなった精神分析も，この反ユダヤ主義という現象の解明には期待されたほどの寄与をしていない。」[36]

アダムズはなぜユダヤ人にそれほど執着したのか。キリスト教社会でユダヤ人がいかに疎外されているかを鋭敏に意識しながら，たとえば『ヘンリー・アダムズの教育』の冒頭で，ユダヤ人と自分自身を対照させているのは注目に値する。名門アダムズ家の一員として国政に参与するいわば生得権が，時代の変貌で無効となり，彼の教育は失敗に終わった。その「失敗」がこの書物の基調である。「もし仮に，自分がエルサレムの神殿の影の下で生まれ，シナゴーグで高僧の伯父から割礼を施され，イスラエル・コーエンなる姓名を授かってさえいたら，来るべき世紀の競争や，その世紀がもたらすはずの賭けに加わっても，これほどあからさまな汚名を被ったり，これほどひどく差をつけられるこ

Hosei University Repository

とはなかっただろう。」[37] つまり，同じ疎外されるにしても，ユダヤ人として疎外されていた方がまだ好都合だっただろう，というのだ。20 世紀中葉に隆盛したユダヤ系文学よりも半世紀早く，アダムズが，ユダヤ人を被疎外人間の原型として認識していたことは興味深い。

同じ『教育』のほぼ中間で，彼は再び同様の愚痴をもらす。「ワルシャワやクラクーフから来たばかりのポーランド・ユダヤ人の間でさえ――ゲットーの臭いをぷんぷんさせ，税関の役人の前で珍妙なイディッシュを唸るあのこそこそしたヤーコブやイザークたちの間でさえ――アメリカ人中のアメリカ人たる自分，数えきれないほど清教徒や愛国者の先祖がいる自分よりも，鋭敏な本能，強烈なエネルギー，自由自在な技倆を持たない者などいないのだ。」[38] 彼は「自分がユダヤ人だったらなあと思うよ，それが時代にふさわしい唯一の生き方のようだから」とうそぶいているけれども[39]，ユダヤ人とて，産業支配の体制に順応しなければ，生存は期しがたかった。アダムズが孤高を保って，ほしいままに同時代人を批評できたのは，アダムズ家歴代の先祖から遺贈された富のお陰だろう。ものの見方が一面的なのだ。彼が黄金時代とみなした中世も，戦争，疫病，社会的紛糾に事欠かなかった。理想とする世界の再生が無理と悟って，彼はいっそ世界の破滅を望んだ。その心情が如実に語られた一節を挙げておこう――「わたしは他のいかなる時代の人々よりも同時代人と相違しており，わたしの信念は，同時代人のそれと正反対だ。わたしは彼らと彼らに関連した一切が大嫌いだし，彼らの呪うべきユダヤ信仰ともども彼らが死滅するのをみたい一心で生きているのだ。わたしはすべての金貸しが拘引され処刑されるのをみたい。」[40]

もちろんボストン貴族のなかには，ユダヤ人や外国人にたいしてアダムズが抱いたような憎悪と偏見に与せず，民主主義的信念を貫いた論客もいた。1897 年，ボストン貴族の間で，流入する「劣等人種」の移民を制限せよと抗議の声があがったとき，トマス・ウェントワース・ヒギンソン（1823−1911）は，純血を誇る「イギリス人」も，相次ぐ侵略や征服で諸民族の混交を経ており，仮に主張できるものがあるとしたら，純粋な血統などでなく複合的構造から生じた力だけであると説いて，門戸開放の原則を再確認した。ユダヤ人の血統は，彼らの入国に反対する人々のそれほど混交を経ていないし，この国に物質的な富をもたらしたのは，初期植民者の子孫ではなく移民の方であった。現在の貴族も当初は庶民だったし，現在の移民の孫が貴族になることもあろう。一切の

Hosei University Repository

美徳を一民族が独占していると思い込むのは間違いである，とヒギンソンは述べた[41]。次章で扱うヘンリー・ジェイムズの妹アリスは，「自分たちの政府がユダヤ人の移民を禁じようと法律を作っているこのときに，ロシアからユダヤ人を追放したといってロシア皇帝に抗議の声をあげているアングロサクソン民族――何という恥さらしでしょう」と書いており[42]，ヘンリーの長兄で心理学者のウィリアムはきっぱり「アングロサクソン民族なら，泣きごとはやめてほしいね」とだけ言った[43]。

ヘンリー・ジェイムズ本人の場合は，国際性とアングロサクソン的地方性を微妙に絡ませ，高度に層状化した社会を描きだそうとする過程で，もちろんアダムズほど過激ではないが，反ユダヤ的，反異邦人的な態度を示すことになる。反ユダヤ性がきわめて明確なペアとしてヘンリー・アダムズとエズラ・パウンドが並ぶとしたら，創作上の必要からか，それとも固定観念の表出かはっきりしないペアとしてヘンリー・ジェイムズとT. S. エリオットを並べることもできよう。

3. ヘンリー・ジェイムズ――『悲劇の美神』他

ヘンリー・アダムズはジェイムズに宛てた手紙のなかで，「例によってぼくは他の誰よりもベレンソンから美術関係の情報を得ている。でもベレンソンて奴は，奴は野人だよ」と書いている[44]。件の美術史家バーナード・ベレンソンは後日次のように述懐している――「われわれには共通点があった。でも，彼は自分がアダムズ家の一員であることを忘れられなくてね，わたしがたまたまユダヤ人であることを，わたし以上にきまり悪く思っていたよ。」[45] 同じベレンソンが「ジェイムズとはどうも反りが合わない，彼はユダヤ人嫌いだから」と言っているところをみると，ジェイムズにもどこかユダヤ人に距離を置く習性があったのだろう。レオン・エイデルは，ジェイムズに美術の専門的知識が欠けていたための無愛想としているけれども[46]，すっきりした弁明とは思えない。しかし，ジェイムズがアダムズの激しい反ユダヤ的偏執に与することはあり得なかった。その違いは，両者のドレフュス事件にたいする態度からも推察できる。

アダムズは終始ドレフュス支持派とユダヤ人を悪の勢力として非難したが，ジェイムズは，ドレフュスにたいする虚偽の告発に深い嫌悪感を抱き，有名な

Hosei University Repository

抗議文の廉で裁判にかけられたゾラを英雄視した。友人で反ドレフュス派の小説家ポール・ブールジェに彼はこう書き送っている――「もしこの事件の最審理を拒んだら，フランスはますます同情に値しなくなるでしょう。」[47] 彼は『北米評論』1899年10月号誌上で批評家としてのジュール・ルメートルにふれ，ドレフュス事件の間ずっと反ユダヤ，反修正を喧伝していたルメートルの声が醜悪であったと記している。彼の称賛の的だったゾラにならって，ジェイムズ自身が公にドレフュス支持の論陣を張ってくれていたら，と惜しまれる。

エイデルは，「ジェイムズの場合，民族的な風俗や特異性を諷刺したり，民族的なステレオタイプを利用することはあるにせよ，彼の性質が偏狭だったり，人種的優越感を帯びることはまったくなかった」と述べている[48]。この記述の後半はさておき，たしかにユダヤ人を一類型でなく一個人としてみているのだろうかと疑わせる箇所が，つまり「民族的なステレオタイプを利用」している箇所が，彼の作品に散見する。ジェイムズは，一人の批評家と二人の女性が交わす会話の形式で，ジョージ・エリオット作『ダニエル・デロンダ』を批評している。女性の一人プルケリアは，「デロンダとミリアムの結婚式で揃った鼻の行列は壮観だったでしょうね」とはしゃぐユダヤ人嫌いだ。もうひとりのテオドーラが「利口で魅力的なユダヤ人には十分すぎるほど会ってるわ。利口でないユダヤ人なんてあたし知らないもの」とユダヤ人の肩を持つや，プルケリアはすぐさま「利口だけど，魅力的じゃないわ」と切り返す。両人とも，ユダヤ人を類型扱いしている点では一般だろう。批評家コンスタンティウスの意見はこうである――「著者は非ユダヤ人の立場からユダヤ人を綺麗に描いています。ユダヤ人自身が，自分たちのことをあのように考えているとは思えません。」[49] つまりこの作品中で主にユダヤ人が扱われる部分，いわゆる「ジューイッシュ・パート」では，生身の人間が描かれていないというのである。この批評家の意見は，ジェイムズ自身の洞察で，ユダヤ人でさえ認めざるを得ない定説となっている[50]。ジェイムズ本人は，ユダヤ人をどう描いたのだろうか。

短編「教え子」のなかで，素性いかがわしいモリーン家の様子が，ユダヤ人の物売りを引き合いに出して描かれる――「誰が彼らの血に五流の理想を染み込ませたのか。……彼らはたしかに利口だが，自分たちがどう見られているか考えたこともないんだ。そりゃ人はいいさ，古着屋の入り口に立っているユダヤ人並にね。でもそんなもの，一家が見習うべき模範になるかね。」[51] だんだん下劣さを露呈してくる国際的な渡り者一家にたいして，主人公の家庭教師が

Hosei University Repository

どう反応するか――当初抱いた敬意が不信，さらには軽蔑，憎悪へと変わっていく過程を，ジェイムズは精密に描写する。その軽蔑，憎悪の段階で引き合いに出されたのが，ユダヤ人の物売りということになる。また短編「カヴァリング・エンド」の末尾の方で「巨大な鼻に小さな鼻眼鏡を乗せ，羽根つきの小さな登山帽には釣り合わない顔をした，ユダヤ人富豪タイプの奥様」が登場する(52)。理解の範囲を超えたものにまでずかずか入り込んでくる観光客の俗悪性が，このユダヤ人風の女性によって暗示されている。

ジェイムズが描いたユダヤ人女性の代表は，『悲劇の美神』のミリアムだろう。ホーソーン作『大理石の牧神』の女主人公ミリアム同様，ユダヤの血を半分引いており，ともにそのエキゾティックな魅力と並外れた才能をユダヤの血に負うという設定である。ホーソーン作のミリアムは母親がユダヤの血を引いたイギリス人，父親が南イタリアの大貴族と縁続きという家系だが，ジェイムズ作のミリアムは母親がイギリス上流階級の出なのに，父親はシティーのユダヤ人ブローカーである。父が早くに死去し，「ヘブライ人なら具わっている安全装置を持たない」母は，夫の遺産を浪費してしまった。父ルドルフ・ルースは，ロス（Roth）というユダヤ系の名前を目立たなくするために 'o' を一個加えてルースとした。株式仲買人だったが，「あの連中の間では」（"among *ces messieurs*"）ありふれた「芸術的気質」を具えていたから古美術商もしていた。非常に多才で，同族のほとんどがそうであるように，「音楽の道にも嗜みがなくはなかった。」ミリアムの芸術的感覚と演劇的才能は，貴族的だが没趣味な母ではなく，父から伝わったものだ。

愛人の外交官ピーターから「君はユダヤの女性だ。それは疑いない」と聞かされ，その言葉にミリアムは飛びつく。自分をさらに興味深く，際立たせそうなものなら何でもよかった。彼女は宣言する――「わたしは，イギリスのラシェルになるわ。」ラシェルとは19世紀中葉のフランスで知らぬ人とてないユダヤ系の大悲劇女優である。ミリアムが父方の家系を辿ってみせると，ピーターは，「すると君は，ラシェルと同族になる資格が十分にあるわけだ」と相槌を打ち，ミリアムは「芸術的に彼女と同族というのならかまわないわ。わたしは芸術家の家系なの。それ以外のことはどうでもいいの」（"*je me fiche* of any other!"）と言い放つ(53)。ミリアムは，ピーターの尽力で近づけた往年の大女優カレ夫人の下で精進に精進を重ね，やがて演技開眼，超一流の女優として成功する。ちょうどホーソーンが罪の本質という中心テーマの探究にミリアム

Hosei University Repository

を係わらせたように，ジェイムズのミリアムも，芸術家の本質，芸術家が一般社会から疎外される実相について，作家の見解を表現表象する手だてとなった。

ピーターは，演劇を諦めるはずがないミリアムと結婚すれば，外交官としてのキャリアに差し障ると考え，結婚をためらう。海外の任地から一時帰国し，いまや人気女優となったミリアムに改めて求婚するが，あなたの方こそ，真に演劇を愛するなら，外交官を辞めてこの道に徹しなさい，と彼女は取り合わない。結局彼女は，ピーターの恋敵だった二流男優と結婚してしまう。そしてピーターは，従兄弟ニックの妹ビディーと結婚して，再び任地へ赴く。

あくまで芸術探究に打ち込み他の生活様式を拒むという同じ主題が，そのビディーの兄で画家のニックと，ピーターの妹で富豪未亡人のジューリアとの間でも並行的に展開する。ジューリアは，もしニックが絵画を諦め自分と結婚してくれたら，政治家として自立できるように財政援助をすると持ちかけるが，ミリアムの場合同様，芸術探究を損なうような妥協は耐えがたいとして，両人の結婚は帳消しになる。ミリアムにとっても，ニックにとっても，芸術が他の何よりも優先し，芸術のためなら，社会的地位や上流階級の余暇も抛つことになる。

このようにみてくると，『悲劇の美神』におけるユダヤ的要素は，結局背後へ押しやられてしまった感がある。たしかに出発点は，美しく，エキゾティックで，「面白い」ユダヤ女性という従来の文学的慣行だが，ジェイムズはそこから芸術家としての超民族的個性に焦点を移し，ユダヤ人の芸風も芸術家の芸風であれば受け入れられる，というミリアムの考えに暗黙の承認を与えているようだ。「悲劇の美神」とは，ミリアムやニックがその足下に身を抛つべき峻厳な女王なのだろう。

『黄金の盃』には，ユダヤ人の古美術商が二人登場する。アメリカの富豪で美術品収集家でもあるアダム・ヴァーヴァーと，彼の娘マギーの親友シャーロット・スタントが訪れるブライトンのユダヤ人古美術商は，グーターマン＝ジュスといい，「非常に愛想がよく，まったく晴れ晴れしい若者」で，まだ30歳そこそこなのに子供が11人もいる。案内されて彼の家に入ると，「11の小さい褐色のくっきりした顔に，誰彼問わぬおなじみの眼が誰彼問わぬおなじみの鼻の両側についていた。」その他に「太って，耳輪をつけたおばさんたちや，……つやつやして，下町然として，訛りと勿体ぶりが独特で，店主よりもっと魂胆をむきだしにしているおじさんたち」がいた。買い物をすませて，もった

Hosei University Repository

りしたケーキとポートワインをよばれ，なにやら古代ユダヤ人の神秘的な儀式のようだった[54]。貧民窟を探訪した良家の御曹司さながらに，ユダヤ人の「誰彼問わぬおなじみの」特徴を改めて異様に感じたというだけの話だ。

もう一人のユダヤ人古美術商は，氏名不詳だが，登場人物としてはこちらの方に重みがある。上記マギー・ヴァーヴァーは，資産家ではないが知性豊かなイタリア人アメリーゴ公爵と結婚する運びになる。ところが公爵と，マギーの親友シャーロットはかつて相思相愛の仲だった。マギーの結婚式に参席するためアメリカから戻ったシャーロットは，結婚祝いの贈り物をいっしょに選んでほしいと公爵に頼み，ブルームズベリーにある上記古美術商の店で，黄金の盃をみつける。黄金といっても，水晶に金メッキを施したものだが，高価なのでシャーロットはためらう。二人は店主に分かるはずがないと多寡を括ってイタリア語でスーヴェニールを交換しようなどと内輪話をし，店主に関係を気づかれてしまう。結局買わずに店を出た後，公爵はあの盃には割れ目があったと洩らす。

やがてシャーロットはアダム・ヴァーヴァーと結婚するのだが，父アダムと娘マギーの間が非常に親密なため，勢いシャーロットは公爵と接触を重ねるようになり，マギーも何か夫との間に蟠りを感じ始める。そのころマギーは，父の誕生祝いの品を求めて，例のユダヤ人古美術商の店に立ち寄り，黄金の盃を買う。ここで意外にも，きずものを高く売りつけたことに気が咎めた店主は，返金のためマギーを訪れる。彼は，部屋に飾ってあった公爵とシャーロットの写真を目にして，自分が耳にした会話の内容をマギーに話す。こうして結婚以前の公爵とシャーロットの関係が明るみに出て，いよいよ夫婦対決の山場を迎える。2組の結婚を実現させた黒幕の人アシンガム夫人は，証拠湮滅を図って黄金の盃を床に叩きつけるが，マギーは帰宅した公爵の前で，割れた破片を暖炉の上でぴったり合わせながら，冷静に夫と自分の間の愛情を確認する。辛うじて原型を留めた「黄金の盃」は，崩壊の危機に曝されながら辛うじて修復された夫婦関係を表象している。

代金を返済したユダヤ人古美術商の行動について，ジェイムズはこう述べる――「黄金の盃の売り主を動かした良心の咎めは，いかなる種類の売り主にも稀なものだが，倹約家たるイスラエルの子らにあっては空前といってよかろう。」[55] ユダヤ人は普通自分の行為の償いはしないものだ，と言わんばかりである。ユダヤ人の悔恨はやはりいかがわしいのだ。彼のマギー訪問は，良心の

Hosei University Repository

咎めに類する動機からの行動というよりも，プロットの進行上必要になった展開なのではあるまいか。しかし公爵が彼のことをシャーロットの前で「けちなユダヤ詐欺師め」，またマギーの前では「腹をくくったけちな野郎」というふうに罵ると，愛人からも妻からも窘められてしまう。シャーロットは美術商としての彼の才覚に感心していたし，マギーの方は，奥様の人柄が気に入ったから返金しに来た，という美術商の言葉を信じていたのだ。美術商に差し伸べられたヒロインたちの同情は，ジェイムズの小説家としての器量を示すものだろう。とはいえ，ひび割れた夫婦関係の象徴たる黄金の盃がユダヤ人の手で媒介されたということは，保持すべき信頼関係を崩壊させる禍々しいブローカーとしてユダヤ人が措定された感がなくもない。

1904年から5年にかけてのアメリカ長期滞在中，ジェイムズはニューヨークのユダヤ人ゲットーを案内付きで巡回している。齢60を越え，20年ぶりに帰国した彼の目には，アメリカそのものがきわめて異質に映じたことだろうが，これほど人口稠密な地域はまれといわれ，「ありとあらゆる限界をはじいてしまった」かのようなユダヤ人街は，ジェイムズを驚倒させた。路上で押し合いへし合いする群衆を目の当たりにして，ジェイムズはこう記す――「なにか巨大で黄ばんだ水族館のなかで，大きすぎる鼻をした無数の魚が，山積みされた海の獲物の間でいつまでもぶつかりあっている感じだった。」[56] ユダヤ人の大群衆のなかで彼ら個人個人のユダヤ的特徴がいっそう際立つのは，「この民族に比類のない強さがあって，無数の断片に切り刻まれても民族的特性を失わないためだろうか。」ここで連想は「蛇だったか虫だったか，千切りにされても這い出していき，刻まれる前と同じく達者で生きるという博物学で知られた奇妙な小動物」につながる。それと同様，このゲットーの住民は「ガラス細工師の作業台上のガラス片のようにうずたかく積まれていながら，その美しいガラス片さながらに，男も女も一人一人がイスラエルの強い輝きを少しも失っていない。」[57]

ジェイムズの連想の妙にもかかわらず，ユダヤ人が魚や蛇といった動物とやたらに比較されている点は，注目に値する。ゲットーの建物の前面に取り付けられた鉄の階段や足場，つまり火災避難用階段が，「人間の姿をしたリスやサルのために，棒やとまり木やぶらんこを取り付けた小さな世界」のようだとも述べている。隠喩的核心のなかに意味を込めるのがジェイムズの手法だとしたら，「ジェイムズはユダヤ人を人間としてかけ離れたものとみなす」[58] とか「ユ

Hosei University Repository

ダヤ人世界が非人間化されている」[59] といったユダヤ系批評家らの言もあながち過剰反応として片づけるわけにはいかない。街頭でジェイムズの注意を惹いたのは，「至る所で目につく強情で，不遜で，無愛想で，エキゾティックな顔」以上に商店の豪勢な照明と店構えで，「ユダヤ人自身の財布のひもを緩めさせようと，こんなにきらびやかで，おおっぴらに餌付けしたわなをしかけてよいものか……ユダヤ人が巧妙な商才を発揮するのは，概してユダヤ人以外が相手のときだ。」[60] ここでジェイムズは，小説のなかで使い古したありきたりのユダヤ人像にまたぞろ立ち返っているようだ。

ゲットー印象記の末尾で，ジェイムズは「比較的礼儀正しい酒場」に入り，人々の晴れやかで悠然とした飲みっぷりに感心しているうちに，単なる群衆を目前にしたときとはちがう苛立たしさを覚えた。より知性的であるはずのここの客たちの英語に，ジェイムズの「文学的不安」が嵩じてきたのだ。「いままでわたしが心掛けてきた類の言語の伝統をつなぎとめるために，なんとかすがりつけるような鉤鼻はないかと，人々の顔をつぎつぎに見渡した。」[61] 彼が耳にした言葉は，イディッシュそのものか，イディッシュの構造に英語の語彙をはめこんだものか，英語は英語でも音韻的，語義的にイディッシュ性濃厚なものだろうが，ジェイムズはこの融合言語に興味を抱いたのではなく，明らかに憂慮を募らせたのだ。ロンドン塔の現代風に改装された部屋のなかで，ジェイムズは昔そこで拷問にかけられたガイ・フォークスの亡霊の呻きを聞けたそうだ。その彼の「批評家の耳」にとって，この酒場は「生きた言葉の拷問室」だった。合衆国における人種の合成そして言語の合成に未知の可能性を認めながらも，その未来の言語が英語でないことは確実だろう，と彼は予言している。

ジェイムズがロウアー・イーストサイドを訪れた 1905 年は，東欧ユダヤ人の大量移民が始まった翌年で，彼がゲットーの大喧騒に圧倒されたとしても無理はない。まだそれほど雑踏が甚だしくなかった 1901 年に，ハチンス・ハプグッドという非ユダヤ人が，「慈善とか社会学的調査とかいう動機からでなく，ただ単にそこの人物や事物が放つ魅力に惹かれ，あちこちのユダヤ人貧民街，つまりニューヨークのイディッシュ世界で多くの時日を過ごすことになった。」[62] 彼は，ラビ，インテリ，詩人，舞台俳優，新聞記者，作家，芸術家らと広範に対話を重ね，ユダヤ人移民が旧世界から携えてきた特質，彼の著書の表題を借りれば，「ザ・スピリット・オヴ・ザ・ゲットー」を認識した最初の

Hosei University Repository

外部観察者となった。この「スピリット」とは，要するに，今日のユダヤ系アメリカ人をかくあらしめた知的活力に他ならない。ジェイムズが訪れたとき，ハプグッドも現地にいたはずで，もし二人が出会って意見を交わす機会に恵まれていたら，ジェイムズとユダヤ人との距離が少しは縮まっていただろうか。

4. マーク・トウェイン――「ユダヤ人に関して」他

マーク・トウェインが初めてユダヤ人に出会ったのは，ミズーリ州ハニバルの小学生時代である。ユダヤ人にたいする恐怖心を克服するのに大分時間がかかった，と自伝に書いている――「ユダヤ人ってのは，古代から伝わってきた，何かじめじめした，クモの巣のような黴が身体中に生えているものと想像していた。」[63] レヴィンという姓のユダヤ人兄弟が学校にいて，子供たちは二人を「トウェンティー＝トゥー」とまとめて呼んだ。レヴィン（イレヴン）を2倍すれば22だろう，という説明を得意になってつけていたようだ。日曜学校では宗教的反ユダヤ主義が教え込まれ，地方新聞の紙上では非ユダヤ人から暴利をむさぼるユダヤ商人がよく非難されていたから，レヴィン兄弟は苛められる他なかった。「二人を十字架にかけてやろうか」という声さえ上がったようだ。

若きトウェインはハニバルで，反ユダヤ的偏見を植えつけられ，また奴隷制を当然視していた。日々観察していた黒人奴隷の苛酷な実態は，ほぼその全容が彼の心の底に定着し，やがてそこからハックとジムの関係のように比類なく奥深い黒人観が醸成されて行くのに反し，出会ったユダヤ人といえば苛め相手，噂に聞いたユダヤ人といえば狡賢い商人くらいのもので，彼が晩年に至ってもまだ神話的なユダヤ人観に囚われているのは，幼少年期を通じてユダヤ人の実生活に接したことがほとんどなかったからだろう。

若いころ身につけた反ユダヤ的な態度を，いつごろからどのように脱皮していったのか。『おのぼりさん外遊記』（*Innocents Abroard,* 1869）執筆のためヨーロッパ諸国からパレスチナまで巡遊し，反ユダヤ主義が遍在する実情を自分の目で確認して以来のことだ，という説もある[64]。といっても，1883年刊行の『ミシシッピー河の生活』には，南北戦争後南部の農園で白人農園主が狡猾なユダヤ商人に手こずる話が出てくる。農園で自前の店を営むのがわずらわしく，「イスラエル人」に店を賃貸しした。ところが，なくてもすむようなも

Hosei University Repository

のまで無知な黒人夫婦にどんどん買わせる。つけだから高価だし，つけは収穫の分け前に掛かってくる。結局黒人の分け前は「イスラエル人」の手に渡り，黒人は借金を抱え込んでやる気をなくし，彼も農園主もともに傷つく。黒人は去り，その後釜も「イスラエル人」を肥やした末，蒸気船で前任者の後を追う。「イスラエル人」とはそんなにあこぎな連中なのか，と誤解を招きやすい話だが，トウェインは何の斟酌も加えていない[65]。ユダヤ人のずば抜けた商才という固定観念は，後述する「ユダヤ人に関して」(1898) と題された彼の本格的なユダヤ人論のなかにも残存していて，発表当時から物議を醸し続けてきた。

トウェインは，1878年から1900年まで，とくに1890年からは10年間連続でヨーロッパに滞在し，その間累積的に反ユダヤ主義関係の見聞を広めて，より明確に離散ユダヤ人の実情や彼らにたいする不条理な敵意を了解するようになったのだろう。1889年から1891年にかけて彼が作ったスクラップブックには，反ユダヤ的な不正や暴行，とくにロシアやポーランドで頻発したポグロムに関する記事が保存されていたという。1894年に勃発したドレフュス事件は，強迫観念として彼にとりつき，反ユダヤ主義だけでなく，フランスにしばしば窺える道徳的堕落の古典的な一例とみなされた[66]。

彼の短編「1904年のロンドン・タイムズより」は，明らかにドレフュス事件を念頭に置いて書かれたものである。米陸軍将校クレイトンはテレビ発明家シュチェパニック殺しの廉で絞首刑の判決を受ける。ところが刑執行の直前テレビに発明家の姿が映ったため，クレイトンはいったん釈放されるが，誰かが殺されたことは明白であるとして，最高裁による再審が行われる。裁判長はドレフュス事件の判例を引き，「裁判所の決定は不変であり，訂正はできない」として，発明家殺しの罪が晴れて釈放されたという事実は棄却する。「犯していない罪で赦免されることはあり得ない」という理由で，最高裁は知事が再発行した赦免状を無効とし，クレイトンに絞首刑を宣告する。アメリカ全土が「フランスの正義」に軽蔑の声をあげている，という一文が結びになっている。上記短編と同じくウィーンで書かれた「ハドリーバーグを腐敗させた男」(1899) にも，ドレフュス事件が巻き起こした波紋の影響が歴然と窺われる。

この作品を取り上げる前に，当時のウィーン事情を概観しておこう。百花繚乱の世紀末ウィーン文化は，自由で前衛的な芸術家や作家が惹きつけられる磁石の趣きを呈していた。そのウィーンで「ハック・フィン」のトウェインは，

Hosei University Repository

当然注目の的となった。ハプスブルク家の公爵夫人や伯爵夫人，外交官，ジャーナリスト，劇作家らが彼のもとに集い寄り，彼の自作朗読会にはジークムント・フロイト博士も顔を出していた。その世紀末ウィーンは，しかしながら，反ユダヤ主義でも悪名高かった。反ユダヤ的煽動家のカール・リューガーが人気市長として君臨し，30年後にオーストリア全土を席捲するはずの独墺併合を予兆していた。ウィーンの文化的エリートには著名なユダヤ系の作家や音楽家が多く，トウェインは彼らと大いに交歓した。ピアノと声楽を学んでいた次女クララが嫁いだ相手は，ユダヤ系ロシア人の作曲家でピアニストのオシップ・ガブリロヴィッチである。この婿は，トウェインのお気に入りであった。シオニズムの始祖とされるテオドール・ヘルツルはじめ名だたるユダヤ人ジャーナリストたちと肝胆相照らしていたトウェインを，反ユダヤが売り物の新聞・雑誌は放って置かなかった。彼はたちまちユダヤ贔屓として非難され，洗礼名がサミュエルであったから，彼自身が隠れユダヤ人ではないかと疑われた。

時は1898年，パリだけでなく近隣列強の首都が，いずれもドレフュス派と反ドレフュス派に分裂していた。ヨーロッパ中が陰険なスローガン，ポスター，戯画の毒で汚染されており，ウィーンもその例に洩れなかった。そのさなかで敢然とドレフュスの無罪を主張したものだから，トウェインは鉤鼻のユダヤ人たちの仲間として揶揄と諷刺漫画の好餌にされた。彼が「ハドリーバーグを腐敗させた男」の執筆にとりかかったのは，そんな中傷と誹謗の毒気に噎せながらであった。

この物語は，道徳的中毒が広がりに広がって，汚染を免れた者皆無という状況を描いている。廉潔と寛大を旨とするハドリーバーグで，ある夜模範的な19家族中の一軒リチャーズ家に金貨入りの袋が届けられ，これは，かつて自分を20ドルの金と温かい励ましで堕落の道から救ってくれたある住人へのお礼である，その方の名前を伺わなかったが，該当者はぜひ受け取ってほしいという添え書きがあった。19家族がいずれもわが家こそ該当者と強いて思い込んだところへ，その該当者の励ましの言葉を記した手紙が舞い込み，証拠物件が手に入ったと喜ぶ。公会堂で全員から提出されたその「言葉」を開封したら，どれもこれも同一内容で，模範家族全部の不徳が明るみに出，以後「われらを試みにあわせたまうな」という町是が「われらを試みにあわせたまえ」に変わったという。シンシア・オジックは「ハドリーバーグを腐敗させた男」の主

Hosei University Repository

要テーマを「蔓延」(contagion) そして「独善」(smugness) とみなしており，ドレフュス事件の影響かどうか確たる証拠はないけれども，この2つのテーマを，世紀末ウィーンの隅々に浸透していた反ユダヤ主義，そして「諸悪の根源はユダヤ」と決めつけていた大多数の市民の無反省に重ね合わせている[67]。

トウェインは1897年後半，『ハーパーズ』に4回連載で「ウィーン激動の時」と題したオーストリア＝ハンガリー帝国議会取材記をものしている。この議会を構成していたのは帝国内19の民族集団で，混沌だけでなく貪欲と傲慢に汚染され，互いに利害が相反する点でまさにハドリーバーグの19軒と似通っていた。公用語をドイツ語でなくチェコ語にしたいというボヘミアの要請が当時の議題で，政府与党は承認したものの，帝国全人口の4分の1を占めるドイツ語常用国民が激怒し，ボヘミアでドイツ語を復活させるまでは，二重帝国連合協定の新規批准を含め，一切の議事進行を妨害する構えであった。ハドリーバーグの名家19軒が金貨よりもむしろあの手紙の言葉に操られて町あげてのスキャンダルに巻き込まれたのと同様，ハプスブルク議会も言語問題で狂奔していた。ボヘミアでのドイツ語復活を企むドイツ系の一代表が延々12時間の議事妨害演説をぶち始めると，議場は罵詈雑言の渦と化した。「オーストリアのドイツ人には降伏も死もない」「チェコ人に言語の権利を認めるなんて，お前それでもドイツ系のリーダーか」「ユダヤの従僕め」「10年間ユダヤと闘ってきたのに，また連中に力を貸すのか。いくらもらったんだ」云々。当時は相手をユダヤ呼ばわりすることが，最大の侮辱として通用していた。やがて議会内の乱闘は街頭に溢れだし，オジックはそこに1938年の独墺併合(*Anschluss*) の前兆を見出している[68]。

暴動はウィーンからプラハへ飛び火し，大半がドイツ語使用者だったユダヤ人，そしてドイツ人が迫害され，またボヘミアの一部ではドイツ人が，別の一部ではチェコ人が騒ぎを起こしたが，どちらの場合にもユダヤ人が槍玉にあがった。このチェコ語問題と並んでドレフュス論争も沸騰していたわけで，トウェインは四面楚歌のユダヤ人を見るに忍びず，自らの存念を開陳しながら，彼らの弁護に当たろうとした。その結果が，上記「ウィーン激動の時」の続編として『ハーパーズ』1899年6月号に発表された「ユダヤ人に関して」(“Concerning the Jew”) である。この論文は，概ね親ユダヤ的とみえて実はユダヤ人問題の急所を逆撫でするような物言いも含んでおり，非ユダヤ人が

Hosei University Repository

ユダヤ人を論ずる難しさを露呈した典型例といってもよかろう。ロンドンの『ジューイッシュ・クロニクル』の論評によれば，「このような支持者が現れると，〈神よ，われらをわれらの友から救いたまえ〉と言いたくなる」そうだ。現に1930年代にアメリカの親ナチ団体が，このエッセイを巧妙に編集して，ユダヤ人憎悪を煽ったこともあった[69]。

トウェインの善意は疑うべくもない。あなたの作品のなかでユダヤ人にたいする無礼な発言がないのはどうしてか，とあるユダヤ人に聞かれたとき，彼は「自分にはそういう性向がないのだ」と答えている。このやりとりに言及した後，彼は「わたしが知りたいのは，ひとは人間であるということに尽きる。もうそれで十分だし，ひとはそれ以下になりようがない」と喝破した[70]。このトウェインの人間観からして，ユダヤ人を100%善の塊とみなすことはあり得ない。「ユダヤ人に関して」を一読すると，ユダヤ人への賛辞が続け様に並べてあるから，「親ユダヤ的」という印象をユダヤ人でも持たされてしまう。強い愛情の絆で結ばれたユダヤ人の家庭は模範的で，慈善団体の厄介になることはなく，ユダヤ人はあらゆる点で遵法的で，暴力犯罪の例はまれだ，とあり，その次に但し書がつく――しかし詐欺，高利貸，保険金目当ての放火，抜け目のない法網の潜り方で信用を落とす一面があり，公務員としては忠実かつ有能だが，兵士として国旗の下に馳せ参ずるのをためらいがちだ，というのだ。愛国心の欠如という彼の指摘には，ユダヤ人側からすぐさま反証の提示があり，後日「軍人としてのユダヤ人」という追伸を加えて，「ユダヤ人の愛国心はキリスト教徒のそれと同等どころか，それを凌いでいる」と訂正している。ユダヤ人のプラス面とマイナス面を差引勘定してみると，「善良なる市民という点で，キリスト教徒がユダヤ人にまさるとはいえない」ことになる[71]。だからこのエッセイは，ユダヤ人よりむしろキリスト教徒から袋叩きにあっても仕方ない内容なのだ。上記の悲観的人間観が生きているかぎり，キリスト教徒はもちろん，ユダヤ人も無傷ではすまない。

トウェインはユダヤ人の取引が誠実なことは認めつつも，ユダヤ人のずば抜けて優秀な頭脳が，有史以来他民族に憎悪され，迫害される原因になったと説く。キリストを磔刑に処したという神学的な理由でなく，それよりもずっと大昔，エジプトで宰相の座についたユダヤ人ヨセフが，飢饉に乗じて国民の財貨，土地，精神的自由に至るまでパンと交換に買い占めたあの経済的手腕こそ，反ユダヤ思想の淵源だという。ローマでキリスト教徒が迫害されたのは，

Hosei University Repository

ユダヤ人と間違えられたからであり[72]，以来どの国でも，法令によって恐るべき競争者ユダヤ人から次々と職業を奪ったが，頭脳までは奪えなかった。ロシア，オーストリア，ドイツでユダヤ人に向けられる敵意の9割は，事業の如何にかかわらず，平均的ユダヤ人に勝てない平均的キリスト教徒の無能が原因である[73]。その無能ゆえの不如意な暮らし向きの方が，どんな宗教上の信条よりも憎悪を掻き立てる。

「たしかにユダヤ人は金儲け屋だから，同じ目的を持ちながら彼らほど有能でない隣人にとっては大変な障害となる。その早熟な知恵で，彼らはいち早く悟っていたのだ――社会的地位を崇めたり，英雄を崇めたり，権力を崇めたり，神を崇めたり，それぞれに違う理想を掲げて議論しても意見の一致はない，しかし金を崇める点では一致する。そこでユダヤ人は金儲けを人生の目標とした。3,600年前のエジプト以来ずっとその目標でやってきたが，目的達成の結果全人類を敵に回してしまったのだから，その代償は大きかった。しかし報いはあった。成功によって羨望を一身に集める――それこそ人が身も心も売って得ようとする唯一の物だからだ。」[74] トウェインのウィーン滞在中，現に何十万人もの東欧ユダヤ人が窮乏と迫害から逃れ，西へ大移動していたわけで，「金儲け屋」としてのユダヤ人だけを強調したのでは，片手落ちの誹りを免れない。それに彼の故国アメリカに目を向けても，当時基幹産業の執行部にユダヤ人は誰一人いなかったのだ。

トウェインが反ユダヤ的なエッセイを書くはずはないという先入見は，「ユダヤ人に関して」を読み進むうちに，だんだんと揺らいでくる。ユダヤ人は誠実で頭脳明晰だ，しかしその明晰さゆえに詐欺や法網くぐりをやる。法網くぐりを宗教的に言い換えれば，ユダヤ教は信仰そのものよりも「文字」にこだわる邪教ということになる。ユダヤ人はキリスト殺しの廉で神学的誹謗を浴びせられてきたが，今度はエジプトのユダヤ人宰相ヨセフが完璧な搾取的手腕を振るったという「史実」の廉で経済的誹謗に耐えなければならない。この「史実」に果して信憑性はあるのか。ユダヤ系の学者ならいくらでも反論を出せそうだ。トウェインは「ユダヤ人もキリスト教徒もこのエッセイをよくは思うまいよ」といったらしい[75]。ということは，ユダヤ人に関して述べた肯定面も否定面もともに正しいとみなしていたことになる。このエッセイを論評したシンシア・オジックの判決は「マーク・トウェインよ，お前もか」（“*Et tu,* Mark Twain?）であった[76]。

Hosei University Repository

イディッシュ作家ショロム・アレイヘムは「ユダヤのマーク・トウェイン」と呼ばれ，トウェインの作品をドイツ語訳で読んでいたかもしれない。しかしトウェインがアレイヘムの作品を読んだ可能性となれば首を傾げてしまう。もし彼がアレイヘムの作品を介して東欧ユダヤ人の社会的・精神的状況になじんでいたら，ウィーンから程遠からぬガリチアのユダヤ人を振り返ってみるきっかけになったかもしれないし，ユダヤ人の頭脳や富をめぐる神話を再考する余裕が生じたかもしれない。再びオジックの表現を借りれば，その古い神話が，「虫干しのために，アメリカ英語の衣をまとって，ご披露と相成った。」(77) ウィーンでトウェインのいわゆる「悪意」(malignity) はほぼ絶頂に達したというが，ミズーリ州ハニバルで育った作家にとって，ウィーンは天国でもあり，また悪魔の領分でもあったようだ。

5. ウィラ・キャザー ――『教授の家』他

ユダヤ人にたいするキャザーの態度は，概ね否定的である。ボヘミア人，スエーデン人，フランス人といった他民族は美化して描かれるのに，ユダヤ人だけが盲点となって，作品中で散見するのは，気に障るようなタイプばかりなのだ。ところが不思議なことに，彼女が音楽や文化全般の愉しみをともにした親友のなかに，ユダヤ人は少なくなかった。1920 年代以降彼女の作品の版元となり，嗜好品の調達に至るまで細心の配慮を惜しまなかったアルフレッド・クノップとその妻ブランシュ，イギリスのピアニスト，マイアラ・ヘス，そしてメニューイン一家，なかんずくイェフディ，ヘプツィバー，ヤルタの神童 3 きょうだい(78)，彼女が尊敬してやまなかったルイス・ブランダイスとその妻ジョセフィーンなど (79)，磨き抜かれたユダヤ人男女と心暖まる交際を続けながら，どうして反ユダヤ的になれるのか。

さらにウィラが 11 歳から 17 歳まで暮らしていたネブラスカ州レッド・クラウドで彼女の一家と仲睦まじかった隣人チャールズ・ウィーナー夫妻のこともある。教養あるフランス系のユダヤ人で，蔵書も多く，ウィラはそれを存分に利用させてもらい，長い午後を同家の居間で読書や夢想に耽った(80)。夫妻は，多感な年頃のウィラを優しく導き，彼女の文化的地平を格段に広げてくれた恩人である。中編「ハリスお祖母さん」(1931) のなかでローゼン夫妻として登場するウィーナー夫妻は，わがままだが利発なヴィッキー（ウィラ）と，家事

Hosei University Repository

を一身に引き受けながら「年老いたライオンの高貴さ」を失わない「ハリスお祖母さん」（ボーク夫人）にとくに目をかけている。ヴィッキーは，ハリスお祖母さんがウィーナー夫妻に取りなしてくれたおかげで，大学の学費も都合してもらえた。キャザーが58歳になって書いたこの中編は，「全作品中最も自伝的な物語」とされ[81]，もちろんハリスお祖母さんが中心に据えられているけれども，ローゼン（ウィーナー）夫妻とくに夫人の方は，ウィラの知性を最初に評価し，刺激と激励を与えた人物として重要な役割を果たしている。

ローゼン氏がなぜ作者のお眼鏡にかなったかといえば，「思索型の地味な男で，哲学書さえ読めれば，西部の小さい町での衣料品店経営というつまらない仕事にも不満はなく，金持ちのユダヤ人大家族のなかで成功していないただひとりの男だった」からだろうし[82]，「どの教会にも属さないローゼン夫妻は，どの教会にも寄付をし，冬は教会の夕食会に，夏は親睦会にでかけていった」というふうに，金銭欲と排他性が認められず，狡猾さ，派手好み，衒いといったユダヤ人のステレオタイプにおおよそ当てはまらない人柄だったからだろう。この「ハリスお祖母さん」を書いた後で，キャザーが心変わりして親ユダヤ的になった形跡はない。最後の作品に至るまで，ウィーナー夫妻以外に理想的なユダヤ人像は目につかないからである。幼少時から熟年に至るまで，識見風格ともに秀でたユダヤ人と数多く交わりながら，ユダヤ人の芳しくない面だけを描きつづけたのはなぜか。キャザーも，1860年代や70年代生まれの作家たち同様，時代の子として，西部・南部連合対東部という地域的対立やそこから派生した金銀論争に巻き込まれ，新旧2つの伝統，文化，価値観のはざまにあって，新しい物質文明の悪しき影響で古い精神文化が買収・支配される危惧が念頭にあったからだろう。その買収・支配を可能ならしめる金権の象徴としてユダヤ人が選ばれたのは，当時流行していたユダヤ陰謀説の影響の他に，古い伝統文化，キャザーの場合だと，西部の大草原で過ごした幼少の頃の記憶を共有できないような人間には胸襟を開けないという，もっと基本的な一種の異人恐怖があったのかもしれない。

キャザーが最も頻繁に反ユダヤ的な表現表象を紡ぎだしたのは，1916年から1925年にかけてだという[83]。彼女は私信，とくに最も親密にしていた相手との私信は悉く焼き払っているので，この辺の理由づけは推測に頼るしかないようだが，1915年に彼女がこの上なく愛していた女性イザベル・マクラングが，ユダヤ系の一流バイオリニスト，ヤン・ハンバーグと結婚するという衝撃

Hosei University Repository

的な事件があった。イザベルは美しく情熱的で，意欲的に芸術を探究しており，キャザーに出会ったとき，この人をおいてわが人生と思想の師はいないと心に決めた。ピッツバーグで過ごした6年間の教員生活を通じて，キャザーはイザベルの邸で彼女と起居をともにした。イザベルをヤン・ハンバーグに奪われたことは，耐えがたい衝撃だったというから，イザベルへの愛着は尋常でなかったことが窺える。ウィラが親しく交際していたユダヤ人たちに劣らず，ヤンも音楽に練達し，すぐれた読書家だった上，ウィラには並々ならぬ配慮を欠かさず，イザベルと同居することさえすすめた。しかしウィラがヤンを好んだことはついになく，強い反感を胸に秘めていたらしい。「ウィラは，ヤンとイザベラの関係をいわば侵害とみなしていたにちがいない」というのが，評伝『ウィラ』の著者ロビンソンの説である[84]。その真偽はともかく，ウィラの小説『教授の家』(1925) は，古来の奥深い精神的伝統が成り上がり者の浅薄な物質本位的価値観によって塗り替えられる状況を扱っており，ヤン・ハンバーグを乗り移らせたようなユダヤ人ルイ・マーセラスが登場する。この小説の構成に目鼻がついたのは，ウィラがパリのハンバーグ邸で1923年の夏を過ごした後なのだ。

作品中のルイ・マーセラスは，紋切り型のユダヤ人ではない。銀行家でもなければ，デパートの支配人でもなく，電気技師である。容貌からしても，ユダヤ的とみえるのは，彼の鼻だけである。それも不愉快な印象を与えはせず，「ちょうど丘の斜面から生え出た力強い樫の木のように，しっかり根づいて，自信たっぷりと逞しく，彼の顔から生え出ている。」[85] なかなかのハンサムで，女性にもてる。少なくとも表面的には，貪欲でも俗悪でもなく，むしろ極端なほど気前がいい。ところが小説の主人公でルイの義父に当たるセントピーター教授は，はっきり理由を指し示せるわけではないけれども，ルイが好きではない。その好きでない理由を手繰りだしていくにつれ，この小説の意味内容もだんだん分かってくるという構造である。

セントピーター教授は著書『北米におけるスペイン人冒険家』全8巻で名誉ある賞を授かり，その賞金で家を新築するが，彼自身は旧居の屋根裏――マクラング邸のそれと同じく仮縫い用のダミーがいくつか置いてある屋根裏――がお気に入りで，そこを動かない。彼の魅力的な長女ロザモンドの夫がルイ・マーセラスで，態度はまろやか，舌はなめらか，勿体をつけるけれども教養は豊かな青年だ。常識的な次元で，彼の欠陥をみつけるのは無理だろう。教授の

Hosei University Repository

愛弟子トム・アウトランドが発明した真空装置を実用化したのもルイだ。トムはかつてロザモンドと婚約していたが，第1次大戦に出征して戦死，特許はロザモンドに遺贈されていた。ルイが航空機用に商業化した特許は彼と妻ロザモンドのドル箱となった。教授の妻リリアンは，ルイが大のお気に入りで，夫がなぜルイを疎ましく思うのか解せずにいる。しかし富にまかせて中西部の小さな町に，パリ仕込みのノルウェイ人建築家に邸を建てさせるマーセラス夫婦の成り上がり的俗物性には，教授だけでなく次女夫婦も反発する。

古来の宗教的，芸術的伝統に寄せる教授の憧憬にそっぽを向き，大学町の凡庸で没趣味な世界の一部と化して行く妻や娘たち――この小説の第1部は，家庭内でもだんだん疎み疎まれてゆく教授の苦悩をたどる。大学の学生にも同僚にも学内政治にも幻滅した教授の唯一の救いは，愛弟子トム・アウトランドの思い出だけだ。第2部は，トムが教授に語った冒険物語からなる。トムは仲間のロディーとともに，ニューメキシコ州のある峡谷で高い岸壁の影に佇む古いインディアンの廃墟を発見し，多数の遺品を発掘して整理と記録に当たった。ワシントンに出向いて発掘団派遣を要請したが徒労に終わり，しかも彼の留守中にロディーが遺品をドイツの人類学者に売り渡すという失態があった。ロディーは支払われた四千ドルの預金通帳を残して立ち去り，トムはそれを学資に教授を介して大学に入学，持ち前の才能を発揮して，教授の期待と信頼を一身に集める学生となり，卒業後も研究，実験を続けついに真空装置の原理を発見した。

この第2部は，不自然な挿入物として不評を招いたとはいえ，古い西部の文化，古いアメリカの生活様式が，無分別な産業支配とその付随文明に侵されている惨状を対照的に表象したいキャザーにとって不可欠な戦略だった。オランダ絵画の室内描写で壁面に付け加えられる「画中画」の効果を狙ったともいう。この第2部で語られるのは，消滅した文明の遺跡を発掘するという英雄的な冒険で，登場人物は利害を抜きにした二人の親友，背景はおぞましい現在でなく，ロマンティックな過去だし，貧相な中西部の町でなく，理想的な自然美として著者が愛でている南西部のメーサだ。これは，8歳のとき両親とともに西部へ向かい，途中幌馬車のなかで両親に死に別れ，以後サンタフェ鉄道の乗務員付きボーイや牧場のカウボーイをやったアウトランドのような西部の男だけが入っていける秘境で，氏素性が不明なだけでなく，伝統的に根無し草同然のマーセラスには似つかわぬ場所だ。

Hosei University Repository

キャザーはトムの創造性を二重に強化する。アウトランドは，アメリカの起源を見出そうとして，古代インディアン文明の遺品を発見，発掘，保存する考古学者であるとともに，実験室で人間の知識の辺境をさらに押し広げる理論物理学者でもある。発掘した古いインディアンの土器には高い値がついたが，トムは全部無償でスミソーニアン博物館に寄贈する。自ら発見した真空装置の原理が実用化に適すると分かってはいても，その実益を手にすることはない。対照的に電気技師のマーセラスは何ら創造的才能を持ち合わせていないが，トムの発見を応用して金を儲ける。トム＝由緒正しきアメリカ人＝革新と創造ができる者，ルイ＝ユダヤ人＝他人の創造したものに寄生して搾取する者，という構図になるが，代喩的な（synecdochic）な観念遊戯としてもひどい話だ。とにかく，外部から侵入して伝統を揺るがし，過去を脅かし，現在を狂わせている張本人がユダヤ人ということになる。著者とアウトランドと主人公の教授は同じ価値観を共有し，アメリカ的伝統を象徴している。教授が自分の息子にしたいと思った男はトム・アウトランドだったが，実際に得た息子はマーセラスであった。かりに教授をアメリカの象徴とすれば，著者の言わんとするところは，アメリカがユダヤ人の手中に陥りつつある，ということに他ならない。教授の娘とアウトランドの発見をともにマーセラスの手に握らせる，というプロットも同じことだ(86)。

第3章に入って教授の憂色はますます濃くなる。いまやロザモンドもそして妻のリリアンまでルイの趣向に靡いている。マーセラス2世の間近い誕生に備えて滞在中のパリから一家揃って帰国するという手紙を受け取って，教授は喜ぶどころか，絶望の時が来たら家族に会わずにすむ方法が何かあるはずだと考え込むのだった――「再び家族と生活することはできないだろう……大きな不幸のさなかで，人々は独りになりたいと思うものだ。」(87) ある日旧居でうたた寝から目を覚ましたら，消えたストーブのガスが部屋に充満していて，そのままだと窒息死する他ないのに，立ち上がって窓を開ける気がしない。彼は死願望に取りつかれていたのだ。裁縫師の女性が折よく旧居に立ち寄って教授を救出し，全編の幕切れとなる。

ルイ・マーセラスのモデルは，前述の通りイザベルの夫ヤン・ハンバーグで，彼にたいするキャザーの感情には，怨恨がくすぶっていたはずである。ところが，『教授の家』は「ヤンへ，物語が好きな人だから」という献辞つきでヤン・ハンバーグに捧げられている。しかも，タイトルの下には「銀にセット

Hosei University Repository

したトルコ玉だったね，そう，いぶし銀にセットしたトルコ玉だった」[58] というエピグラフが，発言者ルイ・マーセラスの名とともに記されている。ルイが最初にロザモンドに会ったとき，彼女がつけていたアクセサリーの話である。もちろんルイには，トムがロザモンドに送ったこの「銀にセットしたトルコ玉」の歴史や価値や美しさは分からないし，ルイから贈られた黄金のネックレースで飾り立てているロザモンドにも分かっていない。キャザーの言わんとするところは，忘れ去られたインディアンのブレースレットの方こそ本物で，買いかぶられた黄金のネックレースは偽物だということである。「物語（narrative）が好きな人だから」という献辞の含意は，いま一つ定かではないが，ヤンの気に入ってもらえる「物語」かどうかを考えるだけで，底意地の程を察しうる。

ウィラ・キャザーの作品や生涯のなかで，反ユダヤ主義はほんとうに重要な意味を持ったのだろうか。彼女が描くユダヤ人像は，ほとんど当時の反ユダヤ的な時好に投じた，いわば戯画的な風俗描写といえるもので，他の人々と同様に，彼女のなかでも現実としてのユダヤ人像と神話としてのユダヤ人像が共存していたのだろう。アダムズの場合と同じく，認識のどこまでが個人的でどこからが集団的なのか，画然と判定するのは無理である。モデルに選ばれた現実のユダヤ人が，申し分のない教養と社交性を保ったまま登場する。しかし著者が内心そのモデルを憎んでいたため，描かれた登場人物に神話的なユダヤ人像が仮託され，その人物に係わる社会的，文化的現象を主人公＝筆者が全面否定する。『教授の家』は，そういう希有な小説である。

（付記）　この論文は，平成8年度文部省科学研究費補助金によるリサーチの一部であり，『法政大学教養部紀要』第92号（1995年）所載「アメリカ文学にみるユダヤ人像」（その1）の続編となるものです。

《注》

（1）　有賀　貞他編，『世界歴史大系　アメリカ史2　1877−1992』（山川出版社，1993）p.42.

（2）　John Higham, *Strangers in the Land* (Atheneum, 1977) p.156.

（3）　有賀　貞他編，前掲書，pp.78−79.

（4）　Oscar Handlin, *Adventure in Freedom* (Mcgraw-Hill, 1954) p.186.

（5）　Arthur Hertzberg, *The Jews in America — Four Centuries of an Uneasy Encounter: A History* (Simon & Schuster, 1989) p.190.

（6）　Handlin, *op. cit.*, p.185.

Hosei University Repository

(7) ナット・ヘントフ著，木島始・河野徹共訳，『ボストン・ボーイ』(晶文社，1989) pp.10−11.
(8) John Higham, *Send These to Me* (Atheneum, 1975) p.151.
(9) Leonard Dinnerstein, *Antisemitism in America* (Oxford, 1994) pp.58−59.
(10) Louis Harap, *The Image of the Jew in American Literature* (The Jewish Publication Society, 1974) p.358.
(11) Dinnerstein, *op. cit.*, pp.11, 18.
(12) Ernest Samuels, ed., *Henry Adams−Selected Letters* (Belknap, 1992) p.192.
(13) 刈田元司著，『アメリカ文学の周辺』(研究社，1962) p.34.
(14) Harap, *op. cit.*, p.360.
(15) Henry Adams, *Novels, Mont St. Michel, The Education* (The Library of America, 1983) p.24.
(16) *ibid.*, p.1229 (Notes).
(17) as quoted in Harap, *op. cit.*, p.360.
(18) *ibid.*
(19) Henry Adams, *op. cit.*, p.797.
(20) Edward N. Saveth, *American Historians and European Immigrants 1875−1925* (Columbia, 1948) p.48.
(21) *ibid.*, p.70.
(22) Adams, *op. cit.*, p.586.
(23) Peter Shaw, "The War of 1812 Could Not Take Place: Henry Adams' History," *The Yale Review*, Summer 1973, pp.552, 545.
(24) Adams, *op. cit.*, pp.600−601.
(25) *ibid.*, p.418.
(26) Saveth, *op. cit.*, pp.73−74.
(27) *ibid.*, p.74.
(28) *ibid.*, p.76.
(29) Samuels, ed., *Selected Letters*, p.335.
(30) Harap, *op. cit.*, p.366.
(31) as quoted in Ernest Samuels, *Henry Adams: The Major Phase* (Belknap, 1964) p.184.
(32) Saveth, *op. cit.*, p.79.
(33) *ibid.*, p.80.
(34) *ibid.*, p.82.
(35) *ibid.*
(36) Robert Wistrich, "Is There a Cure for Anti-Semitism—a Symposium," *Partisan Review* No.3, 1994, p.399.
(37) Adams, *op. cit.*, p.723.
(38) *ibid.*, p.938.
(39) Saveth, *op.cit.*, p.83.
(40) Ernest Samuels, *Henry Adams: The Middle Years* (Belknap, 1958)

Hosei University Repository

p.129.

(41) Hertzberg, *op. cit.*, p.190. ヒギンソンは，ユニテリアン派の牧師で，奴隷制廃止論者。南北戦争中は黒人連隊の大佐だった。映画「グローリー」(1989) は，彼の著書『黒人連隊での陸軍生活』に基づく。

(42) Harap, *op. cit.*, p.368.

(43) *ibid.*

(44) Ernest Samuels, *Henry Adams* (Belknap, 1989) p.405.

(45) *ibid.*

(46) as quoted in Harap, *op. cit.*, p.368.

(47) *ibid.*, p.369.

(48) *ibid.*

(49) *ibid.*, p.370.

(50) 河野　徹，「近代英文学にみるユダヤ人像」，（『法政大学教養部紀要』第 85 号，1993）p.132.

(51) Leo B. Levy, "Henry James and the Jews—a Critical Study," *Commentary* September 1958, p.243.

(52) Henry James, *Complete Stories 1892–1898* (The Library of America, 1996) p.833.

(53) Henry James, *The Tragic Muse* 2 vols. (New York, 1936) Vol.I, pp.204–205.

(54) Henry James, *The Golden Bowl* 2 vols. (New York, 1936) Vol.I, pp.213–216.

(55) as quoted in Harap, *op. cit.*, p.374.

(56) Henry James, *The American Scene* (Rupert Hart-Davis, 1968) p.131.

(57) *ibid.*, p.132.

(58) Harap, *op. cit.*, p.376.

(59) Levy, *op. cit.*, p.246.

(60) *The American Scene*, p.135.

(61) *ibid.*, p.139.（下線筆者）

(62) Hutchins Hapgood, *The Spirit of the Ghetto* (Schocken, 1966) xvii.

(63) マーク・トウェイン著，渡辺利雄訳『自伝』（研究社，1975）p.150.

(64) cf. Sholom J. Kahn, "Mark Twain's Philosemitism: 'Concerning the Jew'," *Mark Twain Journal* Vol.23, Fall 1985, p.19.

(65) cf. Harap, *op. cit.*, pp.349–350.

(66) Carl Dolmetsch, "Jews," J. R. LeMaster, James D. Wilson, eds., *The Mark Twain Encyclopedia* (Garland, 1993) p.413.

(67) Cynthia Ozick, "Mark Twain and the Jews," *Commentary* May 1995, p.56.

(68) *ibid.*, p.60.

(69) *ibid.*

(70) Mark Twain, "Concerning the Jew," *The Writings of Mark Twain Vol.XXII* (Gabriel Wells, 1923) p.264.

(71) *ibid.*, p.270.

(72) *ibid.*, p.271.

Hosei University Repository

(73) *ibid.*, p.275.
(74) *ibid.*, p.277.
(75) Dolmetsch, *op. cit.*, p.414.
(76) *Commentary* August 1995, p.14. (Ozick's reply to Dolmetsch)
(77) Ozick, *op. cit.*, p.61.
(78) E. K. Brown, *Willa Cather: A Critical Biography* (Knopf, 1953) p.326.
(79) *ibid.*, p.135.
(80) Leon Edel, "Willa Cather and The Professor's House," *Psychoanalysis and American Fiction* (Dutton, 1965) p.216.
(81) Phyllis C. Robinson, *Willa: The Life of Willa Cather* (Doubleday, 1983) p.259.
(82) ウィラ・キャザー著，高野フミ訳「ハリスお祖母さん」，『ロシッキー父さん他』（南雲堂，1960）p.107.
(83) Louis Harap, *Creative Awakening: The Jewish Presence in Twentieth-Century American Literature 1900–1940s* (Greenwood, 1987) p.78.
(84) Robinson, *op. cit.*, pp.205–206.
(85) Willa Cather, *Later Novels*, (The Library of America, 1990) p.122.
(86) James Schroeter, "Willa Cather and The Professor's House," *The Yale Review* Vol.LIV No.4 (June 1965) p.503.
(87) Cather, *op. cit.*, p.266.
(88) *ibid.*, p.161.